

麻布大学ティーチング・ポートフォリオ

所属 環境科学科

職階 講師

氏名 落合真理

麻布大学では、教育研究活動その他大学の諸活動を恒常的に自己点検・評価し、その結果を検証して改善に結び付けることにより、教育の質保証を行う観点から、各教員が『ティーチング・ポートフォリオ』を作成しています。ティーチング・ポートフォリオの構成及び更新サイクルは以下のとおりです。

1. 教育の責任・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
2. 教育の理念・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
3. 教育の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
4. 教育の方法の改善・向上を図る取組・・・・・・・・ 毎年
5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組・・・ 毎年
6. 学生の学修成果向上を図る取組・・・・・・・・ 毎年
7. 指導力向上のための取組・・・・・・・・・・・・ 3年
8. 今後の目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年

1. 教育の責任

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年2月

学部1年次から大学院まで、環境毒性学・環境衛生学・環境リスク学を中心とする講義・実習・演習科目を担当している。初年次では環境問題を自分ごととして捉える視点を育み、2・3年次では科学的根拠に基づく思考力とデータ解釈力を養う。さらに実習・機器分析教育を通して測定原理と結果の批判的検討力を指導し、研究導入教育および大学院教育では、正解のない問いに向き合う高度な科学的判断力の育成を担っている。

2026年度現在、研究室における学生指導として4年生2名、3年生7名を担当しているほか、ジェネプロ研究プロジェクトにおける2年生5名の指導、ならびに環境科学科2年生クラス担任としての学生指導を担っている。

科目名	学科・専攻	単位種別	配当年次	受講者数(単位:人)
フレッシューズセミナー	環境科学科	必修	1	79
地球環境科学	環境科学科	必修	1	77
機器分析学・同実習	環境科学科	必修	2	73
機器分析学・同実習	食品生命科学科	必修	2	45
環境衛生学	環境科学科	必修	2	76
環境衛生学実習	環境科学科	必修	2	72
リサーチローテーション	環境科学科	必修	2	74
環境リスク学・同演習	環境科学科	必修	3	73
毒性学	食品生命科学科	必修	3	53
環境毒性学	環境科学科	必修	3	70
環境毒性学実習	環境科学科	必修	3	72
環境衛生学	食品生命科学科	選択	3	54
科学者研究者論	環境保健科学専攻（博士前期課程）	必修	1	24
生活環境科学特論	環境保健科学専攻（博士前期課程）	必修	1	9

2. 教育の理念

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年2月

私の教育理念は、学生が学修内容を自分ごととして捉え、自らの頭で考え始める契機をつくることである。環境問題や化学物質リスクは、科学的根拠に基づく評価と同時に社会的意思決定とも密接に関わる課題であり、単純な正解が存在しない場面も多い。そのため、授業では理論や知識の伝達にとどまらず、社会的背景や過去の公害事例、国内外の比較を提示し、「自分ならどう判断するか」と問いかけることで思考を深める場を設計している。情報が溢れる現代社会において、考えないことこそが最も危ういと感じているからである。私自身、主体的に考えることが重視される学修環境で学んだ経験から、知識の蓄積以上に思考の訓練が人を強くすると実感してきた。初年次から大学院教育まで一貫して、知識の習得とともに科学的思考力と批判的視点を育み、社会の中で自律的に行動できる人材の育成を目標としている。

3. 教育の方法

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年2月

教育理念を実現するため、授業では「段階的理解」と「能動的思考」を軸とした教育方法を採用している。各回の講義冒頭では、授業全体の流れの中で当該回がどこに位置づけられるのかを示し、今回の講義で何を学ぶのかを明確にすることで、学生が学修の地図と現在地を意識できるよう心がけている。あわせて、講義のアウトラインや学習目標、前回内容の簡潔な復習を行い、理解が断片化しないよう連続性を確保している。

講義では、専門用語や理論について定義を示すだけでなく、その背景や前提条件を丁寧に説明し、図表や模式図を用いて概念の全体像を把握できるよう工夫している。その上で、具体例や最新の研究事例、実社会での活用例を示し、学生が学修内容を自分事として捉えられるよう意識している。また、過去と現在、日本と海外の状況を比較しながら説明することで、多角的な視点から環境問題を考える機会を提供している。

実習科目では、データの取得や解析を通して測定の基本原理やデータの読み取り方を理解させることを重視している。測定結果をどのように解釈するかについても段階的に検討させ、批判的に考える姿勢の育成を目指している。

さらに、アンケートや質問へのフィードバックを通して学生の理解度を把握し、授業内容の改善に活かしている。発言が得意でない学生も思考に参加できる環境づくりを模索しながら、教室全体に「考える空気」を醸成することを目指している。これらの取り組みを通して、学生が知識を蓄積するだけでなく、自ら問いを立て、社会と結び付けて考え続けられる力を育むことを到達目標としている。

(1) アクティブ・ラーニングについての取組

有

授業では、学生が受動的に聴講するのではなく、自ら考えながら理解を深められるよう、授業中の問いかけや思考を促す設問をほぼ毎回取り入れている。例えば、公害事例やリスク評価の場면을提示し、「自分ならどのように判断するか」と問いかけることで、知識を使って考える機会を設けている。また、クイズ形式の設問や小テストでは、暗記すれば解ける問題ではなく、「なぜそう考えるのか」「どのような基準で判断するのか」といった理由や思考過程を問う内容を中心としている。これにより、学生が学修内容の本質を捉え、主体的に思考する姿勢を育むことを目指している。

(2) ICTの教育活用

有

教育へのICT活用として、LMS（Moodle）を用いた学修支援を行っている。講義スライドの配布、小テストの実施、課題提出、フィードバックを一元的に管理し、講義後には資料や講義動画を公開することで、復習や自学自習を支援している。オンラインで実施する小テストでは、受験後に正答と解説を即時に表示する仕組みとし、定期試験前には小テストの内容と解説を再掲することで、理解の定着を図っている。また、小テストやアンケートを通じて学生の理解度を把握し、授業内容や説明方法の改善に活用している。

一方で、ICTの利便性が学修の受動化につながる可能性も意識している。以前は講義スライドを事前配布していたが、資料を入手することで安心し、講義中の集中度が低下する傾向が見られた。そのため現在は講義後にスライドを配布する運用とし、講義直後に確認小テストを実施することで、講義中に内容を理解し、自らノートを取りながら思考する姿勢を促している。

ICTは単なる情報提供手段ではなく、学生の思考を支える設計の一部として活用することを重視している。これらの取り組みを通して、学生が「理解したつもり」ととどまらず、自らの言葉で説明できる理解へと到達することを目標としている。

4. 教育の方法の改善・向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年2月

(1) 教育（授業及び実習等）の創意工夫

A

昨年4月の着任以降、本学学生の理解状況や学修習慣を踏まえ、授業設計の見直しを行っている。各回の講義冒頭では、授業全体の流れの中で当該回の位置づけを示し、学修の目的と到達目標を明確にすることで、学びの現在地を意識させている。また、専門用語や理論は定義のみで終わらせず、背景や前提条件を丁寧に説明し、図表や具体例、最新の研究事例を組み合わせて理解を促している。

さらに、講義スライドの配布時期を見直し、現在は講義後に提供する運用としている。講義中はスクリーンを見ながら説明を聞き、自らノートを取ることを促し、講義直後の確認小テストと連動させることで、受動的な理解にとどまらない学修を目指している。実習・演習科目においても、手技の習得だけでなく、結果の意味や解釈について考えさせる問いを取り入れている。今後も学生の反応や学修成果を踏まえながら、授業内容と方法の改善を継続していく。

(2) 学生の理解度の把握

A

授業中の問いかけや小テストを通して、学生の理解度を把握している。小テストでは正誤のみならず、判断の根拠や考え方を問う設問を設け、概念理解の深さを確認している。その結果を分析し、次回講義で理解が不十分であった内容を補足・再説明するとともに、説明方法や進行の改善に反映している。また、講義中の反応や質問内容から理解状況を把握し、必要に応じてその場で補足説明を行っている。

(3) 学生の自学自習を促す工夫

B

講義スライドや講義動画を提供し、学生が自分のペースで復習できる環境を整えている。また、小テストの正答・解説を確認できるようにし、定期試験前には再掲することで授業外での振り返り学修を促している。授業中に示した重要な考え方を自ら整理し直すことを通して理解の定着を図っている。一方で、個々の自学自習状況の把握には課題があり、今後さらなる工夫が必要と考えている。

(4) 学生とのコミュニケーション

B

座学では授業中に問いかけを行い、選択肢形式での挙手等により反応を確認しているが、発言する学生は限定的である。講義後にも質問を促しているが、双方向性の確保には課題を感じている。一方、実習では一人ひとりに声をかけ、進捗確認や疑問への対応を行うなど、密なコミュニケーションを心がけている。今後は座学においても、学生が発信しやすい仕組みを検討していきたい。

(5) 双方向授業への工夫

B

双方向性を確保するため、講義中に問いかけや理解確認を行い、学生の反応を踏まえて説明内容や進行を調整している。座学では選択肢形式の挙手を用いて理解状況を把握し、必要に応じて補足説明を加えている。実習では対話を重視し、進捗確認や助言を通して理解を往復させる指導を行っている。

5. 学生の学修成果向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年2月

(1) 現在までの学生の成績向上に資する取組及びその成果並びに今後予定している取組

小テストや授業中の確認を通して理解度を把握し、難易度の高い内容は次回講義で復習・補足している。その結果、基礎概念の理解不足による誤答は減少傾向にある。今後は復習機会を体系化し、学修成果のさらなる向上を図りたい。

(2) (1) の取組を通じて改善・向上が図られた学生の学修成果並びに当該取組に対して得られた学生及び第三者からの評価又はフィードバック

小テストや講義資料・動画を活用した復習により、基礎概念の理解が深まり、説明を要する設問への対応力が向上している。アンケートでは「理解しやすい」「復習に役立つ」との意見が寄せられている。今後もこれらの声を踏まえ、改善を継続したい。

6. 指導力向上のための取組（FD研修参加等）

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年2月

FD研修に継続的に参加し、授業設計や学修支援、学生対応に関する知見を学び、日々の授業改善に活かしている。

7. 今後の目標

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年2月

今後は、学生が環境問題を自らの課題として捉え、科学的根拠に基づいて考え続けられる力を育む教育をさらに充実させたい。そのため、専門科目に必要な基礎概念の理解をより確実にし、曖昧なまま先に進まない授業設計を行う。講義・実習・演習の連続性を意識しつつ、学生とのコミュニケーションや自学自習を促す工夫、双方向性の向上にも重点的に取り組み、基礎理解の定着と主体的な学び・思考の両立を目指していく。

8. ティーチング・ポートフォリオを作成する際に活用した根拠資料

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年2月

担当科目のシラバス、講義スライド・配布資料、小テスト・レポート課題・定期試験、LMS運用記録、FD研修参加記録、学生のアンケート（授業内容や進め方に関するコメント）